

守屋 信吾

国立保健医療科学院口腔保健部 口腔保健技術室長

高齢者の咀嚼能力の改善が全身の健康状態に及ぼす影響
—栄養状態、体力、ADL、QOL について—

高齢者では ADL の維持は、自立生活、QOL の維持に重要な因子である。ADL は栄養状態や体力により影響を受ける。地域自立高齢者を対象として、咀嚼能力と栄養状態、体力、ADL、QOL との関連性、さらに咀嚼能力の改善が、栄養状態や体力及ぼす影響を明らかにする。

調査は、2009 年 11 月から 12 月にかけて北海道余市町にて、67 歳から 74 歳までの自立高齢者 381 名を対象にして行われた。咀嚼能力の良否は、BMI ならびに握力に正に関連していた。筋力への関連は、筋肉量に依存しなかった。咀嚼能力の低下した者では、老研式活動能力指標の点数が低く、下位尺度では知的活動性、社会的役割との関連が示された。咀嚼能力の低下した者では、口腔関連 QOL の GOHAI、改訂版 PGC モラールスケールが低下する傾向にあった。歯科治療により咀嚼能力を改善させることが、BMI、血清アルブミン値、握力を改善させる傾向にあった。咀嚼能力は、栄養状態、体力、活動性、QOL に関連する因子である可能性が示唆された。